



仁木工芸株式会社

本社

〒140-0011 東京都品川区東大井5-26-22 エクシズビル8F
TEL 03-4218-4700 FAX 03-4212-3423

大阪営業所

〒532-0011 大阪府大阪市淀川区西中島3-18-21 NLC新大阪18号館 2F-D号室
TEL 06-6390-3220 FAX 06-6390-3221

技術開発センター

〒230-0023 神奈川県横浜市鶴見区市場西中町7-29
TEL / FAX 045-511-2342

<http://www.nikiglass.co.jp/>

AZUMA Holdings Group

NIKI GLASS CO.,LTD

100th

ANNIVERSARY

Continuing to evolve with the times,
NIKI GLASS CO.,LTD to the future.



仁木工芸株式会社



創業100周年を迎えて

仁木工芸株式会社 代表取締役社長 仁木 信二郎と申します。

弊社は1923年に大阪府高石市にて創業、2023年に100周年を迎えました。

これもひとえに、100年の長きに亘り社業を支えて下さった数多くの従業員やご家族、国内外の取引先など、関係者の皆さまのご尽力やご支援の賜物と、心から感謝しております。

この度、創業100周年の記念冊子を作成いたしました。

弊社の企業ビジョンは「日本の科学技術の進歩への貢献と全社員の幸福を追求する」であり、研究者・技術者の皆さまに国内外の先進的な理化学機器やサービス等のご提供をしておりますが、ここに至るまではさまざまな事業の立上げを経験してまいりました。

この機会に仁木工芸100年の歴史を振り返りつつ、皆さまと創っていくこれから100年に思いを巡らせることも有意義かと存じます。

ご高覧いただければ幸いです。

仁木工芸株式会社
代表取締役社長

仁木 信二郎

企業理念

日本の科学技術の進歩への貢献と全社員の幸福を追求

私たち仁木工芸は専門知識と付加価値を基にした企業活動を通じて、顧客である日本の研究者・技術者や日本の科学技術の進歩に貢献し、全社員の物心両面の幸福を追求します。

1 他社にはない専門知識

Expertise



私たちは、大学・官公庁・民間の研究機関を主なお客様とし、極低温・放射線計測などの分野の専門的な知識を基に、国内外から最新情報・技術を導入・提案することで顧客の繁栄・発展に貢献することを使命とします。

2 製品への付加価値

Value-added



私たちは、国内外の先進的な製品を導入するとともに、既存製品にはない価値をエンジニアリング技術によって付加し、顧客の要求を満たします。

3 全社員の物心両面の幸福



私たちは、5つの基本的欲求が満たされている組織、仕組みをつくることで全社員が幸せを実感できる会社を追い求めます。

ビジョン

日本の科学技術の進歩への貢献と全社員の幸福を追求

対顧客

極低温・放射線計測の研究・技術パートナー

私たちは、顧客の研究・技術パートナーとして顧客の成果の創造に貢献し続けます。私たちは先進的な国内外の製品に、自社技術や知見を付加して、顧客の要求を実現する商品・サービスを提案、提供します。

対社員

自由闊達な自己実現の舞台

私たちは、自由闊達な企業活動のもとで物心両面が満たされる、生涯の自己実現の舞台を社員に提供し続けます。社員同士の絆・連帯感、個性・自律性を大事にします。理念からの深いマッチングがなされ、5つの基本的欲求が満たされる組織を目指します。

対社会

社会貢献グループ

私たちは、提供する商品・サービスを通じて安心安全な生活環境を維持すると同時に、グループ会社や協力会社、顧客とパートナーシップを組み、持続可能な社会を共創することで、社会に大きく貢献し続けます。

100years History —— 1907 - 1952

100年間の節目となる今、私たちは創業からの出来事や軌跡を辿ります。この特別な時を迎え、社会の変革や技術の進歩によってもたらされた劇的な変化は、過去だけでなく、未来をかたどる道標となります。

1923



旧本社工場の正門前にて 駿馬の副賞として獲得したトヨタ・トヨペットとともに

優れた技術を用いた製品を 製造・輸出し、外貨を獲得して国家に貢献すること

大阪・泉州のガラスが歴史上に現れるのは、紀元5~6世紀(大和朝廷時代)といわれる。明治の初めに堺や大阪玉造のガラス細工技術が和泉地区にもたらされたことで、現在の和泉市を中心にガラス玉産地が形成された。装飾用ガラス玉、人造真珠、ガラス細工置物などガラス生地の生産、加工、人造真珠箔の製造など幅の広いそ野があった。高石市も古くから農閑期の仕事としてガラス玉を製作する人々が多く、仁木清七は1923年にこの仕事を始めた。



ツキカワ号優勝時、右二人目から丈文、三夫、清七

1942

高石市羽衣に500坪の居宅、事務所、工場を建設

1942年 現在の高石市羽衣に500坪の居宅、事務所、工場を建設。事業は成功し、泉州地場産業の中心的な存在になった。戦後の産業復興要員、「技術保存資格者」(保存を要する技術を有する者)として政府に認定され、太平洋戦争に招集されることもなかった。戦後は馬主としても活動、多くのサラブレッド種の名馬を所有し1951年にツキカワ号が桜花賞で優勝、賞金400万円(当時の大卒初任給3千円)を獲得。ファイナルスコア(1955年天皇賞2着)、ホマーリヒ(1960年宝塚記念・中京記念優勝)などが活躍、所有馬の獲得賞金の累計は現在価値で10数億円程度と考えられ、会社にも大きな利益をもたらした。

1907
(創業者 仁木清七 誕生)



1923 (清七 16歳)

仁木硝子細工製作所を創業
ガラス装飾品の製造・輸出

創業者 仁木 清七(1923~1981)

1927年 金融恐慌
1929年 世界恐慌

1942

高石市羽衣に500坪の
居宅、事務所、工場を建設

1947

昭和天皇が
和泉市を御臨幸

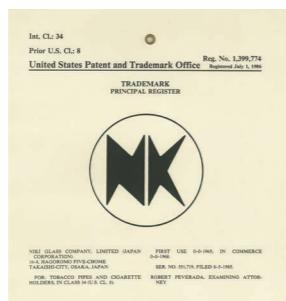
1952

仁木硝子工芸株式会社が
法人化



仁木硝子細工製作所を創業。ガラス装飾品の製造・輸出。

太平洋戦争終戦直後、連合国総司令部(GHQ)より呼び出しがあり清七は上京、最高司令官Douglas MacArthur の指令により、米国から民間第一便で来日する米国人バイヤーに対応することになった。泉州地場産業の中心的な存在になっていた清七は、婦人用ガラス装飾品(ネックレス、イヤリングなど)、ガラス細工(動物)などバイヤーの要求する商品を自社工場で製造、伊藤忠商事物資部を通して輸出し、戦後日本の外貨獲得に寄与した。



昭和天皇が和泉市を御臨幸

1947年6月5日 昭和天皇が和泉市を御臨幸、清七が「天覧に供」した記録が残っている。(下記写真)
当時は自社工場に約100名の女性従業員がいたとされる。のちにマッカーサー夫人も工場を訪問した。地元の小学校の課外授業の工場見学にも仁木工芸の工場が利用されていた。



1923

1947

1952

仁木硝子工芸株式会社の創立総会を開き、法人化した。

現在の仁木工芸株式会社の企業理念に通じる内容となっている。また、外貨獲得を強調しているところは時代性を感じさせる。

企業理念

優れた技術を用いた製品を製造・輸出し、
外貨を獲得して国家に貢献すること

1952(昭和27)年1月5日付 創立事項報告書より抜粋
「優秀なる特殊技術を以て人造真珠・硝子細工を製造し、海外に輸出して外貨獲得の一助たらしめんと計画企図し、ここに同志相寄ってこれらの製造及び販売を主目的とする資本金180万円の株式会社の設立を発起しました」

発起人:仁木清七(代表)、仁木政一、仁木美佐子、奥田薰、奥田茂、大光春雄、喜田シズ子

100years History —— 1952 - 1985

清七の次男三夫を支社長とする
東京支社輸入部を港区虎ノ門に開設



1966



現地法人パートナーLonny Guns, Gene Cuthberson, 文文

清七の長男丈文が神戸から貨物船でアメリカに留学、
初めて輸出工芸品の顧客を訪問した。

商品はニューヨークで荷揚げされ、問屋を通じて全米に流通するプロセスがあり、末端の小売業者では輸出時の数倍の高値で取引されていることが判明。対応としてカリフォルニア州の小売店に工芸品を持込み、直接輸出を模索した。



1976

東京都港区三田にてニキグラスビル竣工(8階建)

東京支社として利用した8階以外のフロアはキャノンコピア販売をメインテナントとし、その後リクルート社やザイマックス社の協力を得て、不動産事業としてビル売却までの38年間安定した賃貸収入を会社にもたらした。ビル建設に合わせてオープンオフィス家具・人工樹木について米国からの商品輸入を始めた。

1982

1964

仁木工芸株式会社と改称
ゴルフ事業、加州現地法人、
「ニキグラスビル用地」取得

1965

ゴルフ練習場事業
を開始

1975

現地法人を設立(カリフォルニア州サンタモニカ)
希釀冷凍機を京都大学平井研究室に導入成功

1976

東京支社輸入部を
港区虎ノ門に開設

1979

ゴルフ練習場事業終了。跡地は高石市が学校用地として収用したため、
収用資金で東京都港区三田にビル用地を取得することに成功した。

1981



丈文が2代目社長に就任

1982

ニキグラスビル竣工に伴い、
東京支社輸入部を当ビル
8階に移転

仁木 丈文 (1981~2016)

1985年 プラザ合意

1965

第2工場用地として購入していた

3000坪の土地を利用し、ゴルフ練習場事業を開始。

ゴルフ練習場事業は安定的に現金収入が得られることが魅力だが、日常業務のほかに開業後に増え始めた近隣住民からのクレーム対応など、工場運営とは異なる手間や労力がかかるビジネスだった。のちに自社ビル用地取得に尽力いただいた旧三和銀行(現三菱UFJ銀行)との取引は、大風により練習場ネットが破損した際の対応がきっかけとされている。



1975

UC San Diego発ベンチャーの
SHE代理店として、希釀冷凍機
を京都大学平井研究室に導入成
功。続いて名古屋大学益田研究
室、東北大学金属材料研究所に
納品し、競合する英 Oxford
Instruments社に対抗。その後温
度センサー、超電導マグネットなど
極低温製品を各大学・研究機関に
展開していく契機となった。

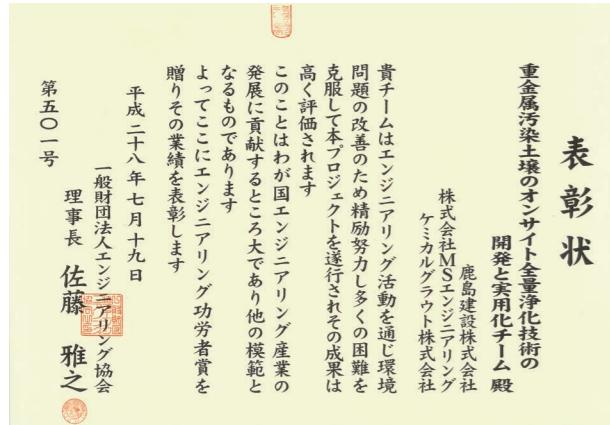


1985

*Quantum Design社
(元SHE Ron Sagar社長)と
代理店契約を締結

QD社はSQUID帯磁率計などの物理分野製品のメーカーであり、
高温超電導ブームに乗りQD社の生産が追い付かないほど販売
実績を上げた。(次ページ「TOPIC」参照)
80年代以降、三夫をリーダーとした東京支社に有能な若手(故鈴
木朝雄、現副社長西晃司、現技術担当役員安藤真悟など)が続々
と入社し、理化学機器輸入ビジネスが拡大していった。

2005



株式会社MSエンジニアリングを設立し、 丈文が社長就任

MSエンジニアリング社:大阪大学西嶋先生指導のもと超伝導磁石の産業界への普及を目的に、NEDOをはじめ約8億円の補助金を獲得して新規事業開発を行った。鹿島建設と共同で重金属汚染土壌の浄化技術を完成させたが、ビジネス上の目標としていたリニア新幹線工事への参入を果たせず2020年に同社を清算、関連技術を辰巳エヤエンジニアリング社に移管した。

1985

人工樹木部門を分社し、日比谷花壇・日本ビルサービスとともに
インテリア・グリーン社を設立



1999

大阪営業所を大阪市淀川区西中島に開設、のちに本社(高石市)住所に移転

2011

東日本大震災のち、政府の要請で輸出用貨物の放射線量測定の需要が生じた

仁木 三夫 (2016~2017)

1987年 ループル合意

2008年 リーマン・ショック

2011年 東日本大震災

2013

コンテナを積載したトラックごと計測が可能な放射線計測システムを東京港・横浜港に大量納入(計82基、右記写真)、以後10年以上に渡り同機器の保守点検を請け負っている。



技術開発センターを横浜市リーディングベンチャーブラザ(横浜市鶴見区)内に開設、のちに鶴見区内で移転し、現在も自社製品などの製作・作業の拠点としている。

2003

低温機器30年の思い

仁木工芸株式会社 仁木 三夫



35年ほど前になりますが、弊社で米国製のクライオスタッフを取り扱い始めたとき、その頃大阪大学におられた故山本純也先生からお呼びがかかり、「いままで低温機器の輸入をやろうとして永続した会社はほとんどなかったけど、君は眞面目にやる気はあるのか?」と問われ、「はい、そのつもりです」と答えたところ、「そんなら、低温工学会に入らなあかんで」と入会申込書を渡され、その場で入会することになったのが、この学会とのかかわりをもつ始まりでした。その頃は外国製の低温装置は Oxford Instruments 社製くらいしか日本には入ってきておらず、米国製のものは大型のヘリウム液化機くらいのもので、アメリカの低温機器はほとんど日本国内には紹介されていませんでした。

最初にクライオスタッフのメーカーと代理店契約すると、彼らの取引先である他の低温機器メーカーを次から次へと紹介され、温度センサー、超伝導マグネット SQUID、希釈冷凍機など取扱商品を短時間の間に増やすことができました。それに、ブルックヘブンにいたとき使っていたものと同じものが必要だと、スタンフォードでの研究の続きをするので同じ機種の製品を欲しいなど、米国ですでに使っていただいている方々からのご依頼をいただき、自分の知らなかつた商品まで顧客の方から教えてもらって販売を伸ばすことができました。そのうち、高温超伝導研究のフィーバーが起り、それまでは年に1台くらいしか売れなかった SQUID 帯磁率計がデパートのバーゲンセールのごとく先を争って購入していただいたことは、今から思えば夢のような出来事でした。

その後低温実験の裾野がどんどん広がり、それまで 10mK の温度を作り出す技術が State of Art であったのがボタンひとつ押すだけで可能な希釈冷凍機ができ、20 テスラ近い磁場が液体ヘリウムを入れることなく作られたりする時代になりました。低温機器を扱う会社も増え、世界各国より新しい技術の機器が多く我が国に入ってきており、若い

研究者に使いこなされ、素晴らしい成果が得られているのは我々機器を販売するものにとっても、嬉しい限りです。以前は輸入品が毛嫌いされ、輸入業者は日本の産業の発展を妨げる國賊のように言われたこともあります、機器も研究者も国境などなく低温工学の発展に寄与しているのは素晴らしいことだと思います。

自分自身もほんの少し前までは、低温工学会の中では若手のつもりで居りましたが、最近、周りを見渡せば高齢者の部類になってしまっています。しかしながら元気な長老の方々もまだまだ多くおいでになり、教えていただく事もたくさんあります。ベテランも若手も垣根なく話し合える低温工学会の雰囲気は楽しいものです。

ウシの精子の保存、運搬用に作られた液体窒素容器が、ヒトの受精卵や臍帯血、先端のiPS細胞などを凍結保存し、SQUID 脳磁計、超伝導 MRI が臨床の場で使用され、超伝導磁気浮上列車が実用化されようとしていますし、料理にも液体窒素が使われる時代です。他の分野に比べても、低温技術、低温工学の進歩には眼を見張るものがあり、研究分野のみならず、日常生活にも低温技術がなくてはならないものになっております。この素晴らしい進歩、発展に、ほんのわずかでも関わったことに幸せを感じております。また、何もわからない私たちを温かく迎え入れ、ご指導いただいた先生方、今まで育ててきてくれた諸先輩がたに感謝し、今後の低温技術の担い手になる若い研究者、低温機器の販売を生業とする人々に期待し、ますますの低温工学の発展を祈念しております。

100years History —— 2017 - 今・未来

2021



アズマホールディングス株式会社が 仁木工芸株式会社の全株式を取得

より大きな事業グループに参画することで、将来の人材確保、財務の安定などを考慮した判断だった。アズマホールディングス社としては、高付加価値事業への参入、商圈拡大などのメリットが期待された。

 **AZUMA Holdings Group**

next 100years

時代に合わせて、変化し続ける。

仁木工芸はその先へ

私たちは、お客様とともに、継続的なコミュニケーションを大切にし、お客様のビジネスや技術課題に対し、独自の専門知識や経験を活かした最適なソリューションを提供しています。

これからも、お客様とともに成長し、より良い未来を共に実現していくことを目指しています。



2017 仁木信二郎 4代目社長就任	2020 ニキグラスビルを JR東日本ビルディング社 に売却	2021 アズマ ホールディングス・ グループに参画	2022 本社を創業の地高石市 羽衣から東京都品川区 東大井に移転	2023 創業100周年を 迎える
仁木 信二郎 (2017~)				

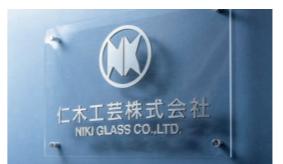
2020年 新型コロナウイルス流行



ニキグラスビルを JR東日本ビルディング社に売却

竣工以来安定した賃貸収入を生むとともに会社の顔として存在感があった自社ビルだったが、必要不可欠な老朽化対応にかかる設備投資が事業を圧迫する恐れが大きく、またJR東日本が社運を賭ける高輪ゲートウェイ・プロジェクトの影響で周辺地価が高騰している状況があった。また、開発担当としても深く関わっていたMSエンジニアリング社を清算した丈文は、仁木工芸の会長職を退任し全事業から退いた。

2022



本社を創業の地高石市羽衣から 東京都品川区東大井に移転

創業地の工場を閉鎖し、理化学機器の輸入販売が主業になった90年代から本社の東京移転は検討されていた。メインバンクとの関係などから実現しないなかつたが、東日本を主なテリトリーとする親会社の要望でようやく実現した。同時に、旧本社所在地にあった大阪営業所を大阪市淀川区西中島に再移転、営業活動の利便性が高まった。

